

師匠亡き後、勝手気ままに歌作りをしていたが、これではいかぬと思いなおし、「和歌とは何か」（渡部泰明著）を読んでみた。和歌には「精神修養の機能がある」と書いてある。途端に筆が重くなり、今までの様に歌を詠むことが出来なくなつた。某君にそれを打ち明けると「学がすすみすぎたね」と指摘された。この一言に気を取り直して、また、数首詠んでみた。

● 三日月と明けの明星並びおり静かに登る朝日をまてり

夜明け前に目が覚めて、外をのぞくと月と星が空低く並んでいた。まるで朝日を待つがごとくに。

● 山之辺に雲立ち上り夏来たる燕飛び交う足柄アシガラの野に

今年の五月は急に夏がやってきた。田植えの始まる頃は燕も巣つくり忙しい。

● 静々と歩道を走るトラクター農婦は苗を田に運びゆく

綺麗に束ねられた苗を大事に運んでゆく。今は田植も農機でできるので、女性が一人でもやれるのかと思つた。

● 八十ヤッかけて此処ココに集える輩トモガタは過ぎにし日々トモガタの想いを語る

傘寿の会に集まつた小田原高校十一期生は、顔に歴史を刻んでいた。一人ひとりの八十年はズシリと重い。

● 弟よ君死にたもうことなけれ悲しき歌は今も変わらず

与謝野晶子が一八九四年に詠んだ歌が、二〇二二年にあつても相変わらずひしひしと胸に迫るこの現実をどうすればよいのか。

● なんのため死なねばならぬ繰り返し尋ねど誰も応えるものなし

ロシアもウクライナも若者は同じ悩みと苦しみを抱える。

● 年寄りトモガタは戦さを命じ死にゆくは先行き長き若者達よ

戦争は若者の夢と希望を粉々に砕く。